

「運用の全責任は私に」

高水準の新規株式公開（IPO）が続く一方、ネットバブル崩壊後の相場低迷が長引き、ベンチャーキャピタル（VC）の経営も転換を迫られている。荒波をどう乗り越え、新興企業の発掘・育成に弾みをつけるのか。有力VCの代表に聞いた。第一回は個人が投資に全責任を持つ米国流ベンチャーファンド（投資基金）の設立で先駆けとなった日本テクノロジーベンチャーパートナーズ（NTPV、東京・文京）の村口和孝代表（42）。

経営転換期

トツプに聞く

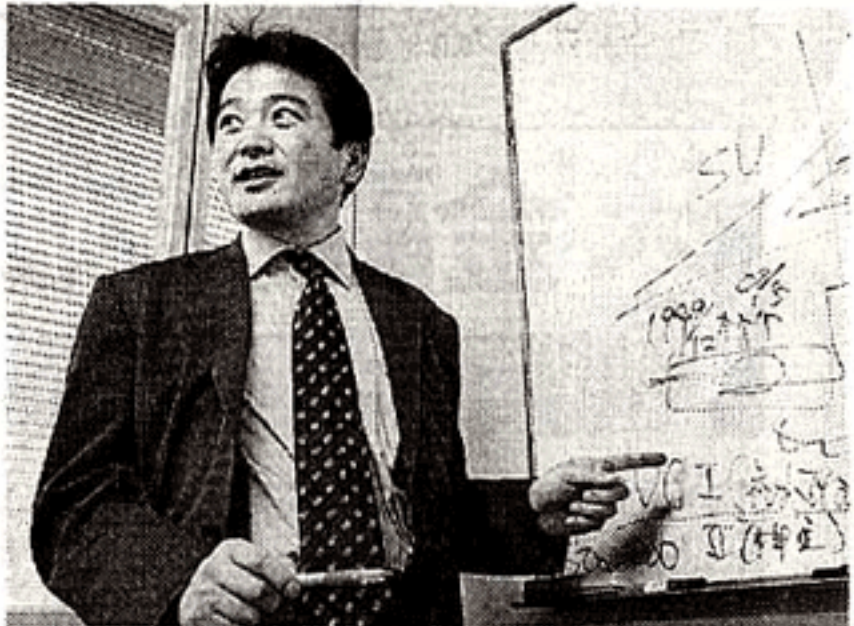
「金は出すが口は出さないと言われてきた旧来型VCと大きく違う。」

大企業系と覚悟違う

「米国のように個人が全責任を持って運用している。これまでに設立した四

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ

村口和孝代表



企業発掘は個人の力量

投資先社長に緊急登板も

〈会社概要〉

本社所在地	東京・文京
設立年月	1998年7月
従業員数	約20人
重点分野	情報技術を中心とした未公開企業
ファンド規模	4本(計約60億円)

「瞬間に投資方針を決められる利点も大きい。投資先企業の取締役会に自ら参加して事業計画を練り、私が承諾できれば即時に資金を出す。投資はスピード重要」

「多くの人材を抱える大企業系のVCの方が有利では。」

「個人として運用に責任を持つのが当然だ」

「厳しい目を持った出資者なので出資者総会では投資先企業、経営者、事業内容が投資に値するかどうかが十分に説明できるようにしておかなければならない。私自身が方向性を誤らないためにも必要な説明義務だと思っている」

「資金回収のための出口が狭まったことを意味しており、厳しい状況だ。未公開ベンチャーの多くは逆風の延期が続出している。」

「VCは物言わぬ株主でなく、取締役を出して投資先企業の事業を再構築する覚悟がないとだめだ。私は投資先企業十五社のうち、八社の非常勤取締役を兼務している。現実に情報技術分野の需要急減やネット株バブル崩壊に対応するため、既存投資先の大半で事業モデルを大幅に変えた」

「なかでも電子メール関連ソフトを開発するアフエクトコミュニケーションズ（東京・千代田）は、私自身が昨年十一月からリリース投手として社長を約半年務め、データセンタ事業からの撤退とソフト開発事業の強化を実施した。サラリーマン意識が強い日本の従来型VCでは、自ら社長役に乗り出すことはまったく考えられなかった」

（聞き手はベンチャー市場部 銀木晃）

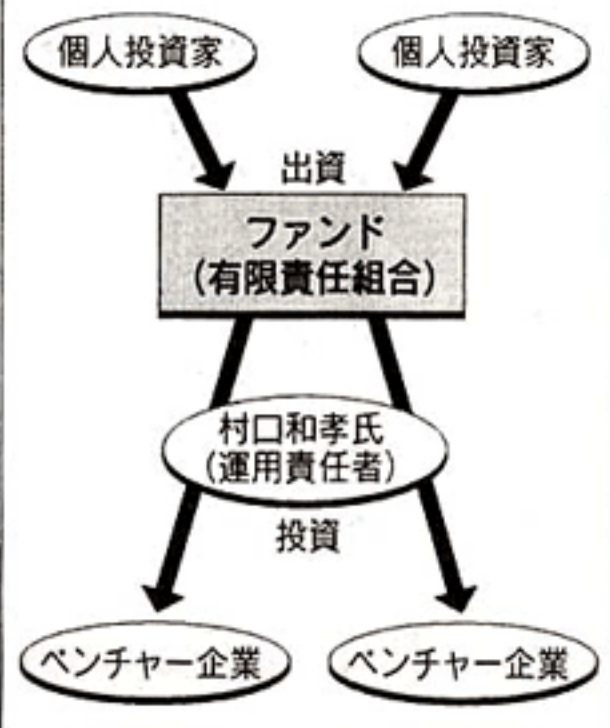
本のベンチャーファンドは、従来型VCと違い、個人が運用に全責任を負うという出資者との契約に基づいて設立した。これによればファンドの出資者は最

大でも出資額を失うだけの有限責任で、私自身がすべての投資にかかわる法的責任や運用リスクを負う

「仮に、役員を兼務している出資先企業の賠償責任などが発生し、ファンドの財政状態が債務超過になれば」

「有望な起業家を独自の人脈で探し出し、事業の将来性を見抜き株式公開させるのは、個人の力量にかか

個人型ベンチャーファンドの仕組み



「ベンチャー支援や起業に理解が深い投資家を増やさなければならぬ。私の運営するファンドは起業の難しさ、事業経験を熟知した堀場製作所の堀場雅夫会長らベンチャーを見る目を十分に持った個人投資家から集めた。まだ投資が成功したと言える段階ではないが、中長期的な視点から運

「当社は昨秋から新規投資を抑制する一方、既存投資先に追加出資して事業展開を加速させ、勝ち組に残れるようにする投資方針に切り替えた」

事業再構築自ら指示

「VCの経営支援力も